

◆特集 ヘルスサイエンスライブラリーの構築◆

「動きのある図書館」をアピールするテーマ展示 —情報編集によるアナクロサービス戦略の提案—

石井保志

I. はじめに

社会における多くの一般の人が図書館員に抱くイメージは、映画やテレビドラマに象徴的に描かれている。おかたい融通がきかない小役人、本の貸出・返却がメインの楽な仕事……。誤解を招く描写に、私たち図書館員は時に怒ることもある。だが社会から相対的にこのように見られていることも事実であり、社会からどのように見られたいかという、職業イメージ確立の運動も私たちは特にしてこなかった。そして社会はおろか所属機関の幹部・教職員にさえ図書館のPRを怠りがちだったつけは、今後、図書館の存亡に致命傷を与えかねない。

筆者は、利用者サービス向上のために日々鍛錬している図書館員の底力を、何とか目に見える形でアピールできないだろうかと考えている。誰かが図書館の地道な仕事を見てくれる、図書館の役割は無くなるはずはないと思ったら大違いである。図書館利用者や設置母体の幹部に図書館サービスのアピールをしなければ、図書館という建物は存続しても、全く違った図書館、表層だけの図書館にとってかわられつつあると言えよう。

昨今の行政改革、経営刷新が断行される中で、公務員や病院職員の削減に象徴される人手不足、業務増大は、エンドユーザーにシワ

寄せが行きやすい。図書館も例外ではないことがわかってはいても、骨身に染みて実感することは少ない。しかし、司書のいない図書館、人材派遣やボランティアで支障ないという状態になりかねない状況はすぐそこまで来ている。一部の公共図書館の指定管理者制度導入、私立大学図書館の業務委託の現状を見て、その予兆が大きく感じられる。この数年で、図書館は聖域ではなかったことがいとも簡単に証明されてしまったのだ。

しかしながら情報ナビゲーター、資料の組織化を工夫する専門家なくして、果たして図書館利用者は効率的、効果的に情報入手行動がとれるのだろうか。このような危惧から、図書館員の役割と使命に基づいた試みを提言したいと思う。

II. デジタル時代だからこそ

現在、多くの図書館は、伝統的図書館機能と電子的図書館機能を融合した形態をとっている。紙媒体資料を中心とする閲覧席を備えた「来てもらう図書館」と、データベースや電子ジャーナルを中心とする電子図書館の両機能が相互に補完するハイブリッドライブラリーである。利用者も図書館員も紙と電子の異なる情報資源を適切に使い分けている。このようにハイブリッドライブラリーは、広範囲な情報源の組織化により、利用者が電子的情報源や伝統的情報源に自由にアクセスすることを可能にした。

電子媒体による情報提供が出来るように

ISHII Yasushi

東京医科歯科大学附属図書館

ishii.lib@tmd.ac.jp

なった現在、「来館せず」に図書館機能を利用することが可能になり、利用者の利便性は飛躍的に増加している。

しかし、電子上であらゆる情報提供が可能に思える時代だからこそ、図書館と図書館員が利用者に役立つ存在であることをアピールする必要があるのではないだろうか。それは図書館員が経験の全てと時間と手間をかけ、利用者に役立ちたいという思いを込めた「ソフト」を目に見える形で提示することではないかと思う。

デジタル時代に、図書館員魂などのアナクロニズムを持ち出すことは時代錯誤ではない。むしろ技術的なものに、利用者にとってやさしい「ソフト」をつけ加えて提供することこそ、私たち図書館員の専売特許であり使命なのである。

Ⅲ. 図書館空間に時代の動きを

利用者や社会に対して、目に見えて実感できるサービス、役に立つサービスをアピールできないだろうか。それができれば、図書館の役割を全うさせるための予算要求、サービス水準維持のための人員要求など「正当な要求」も萎縮せず主張でき、また援護射撃をする人も現れてくれるだろう。大事なものは抽象的な理念ではなく、利用者の役に立ち、社会的意義をも実感できる図書館サービスを提供することである。

このサービスを具体化するキーワードの一つは、社会とともに「図書館は常に動いている」ということを演出することではないかと思う。多くの図書館では、利用者が来館しても図書館が時代とともに呼吸しているとは感じられない。いつ来ても館内の風景に変化がないという印象を与えている。

そこで、日常的に行っている様々な気配りをもっとパワーアップして、利用者から目に

見える形にしたらどうだろう。図書館員は資質的にこのようなface to faceを大切にしたいサービス精神を有する人が多いにもかかわらず、外部に対して強烈に自己主張・自己PRすることが少ない。

利用者から見ると、図書館は「動的」な印象が少ない。現場の図書館員は忙しく小まめに動き回っているため、図書館員本人は動的であると錯覚しがちである。しかし狭隘な空間を、忙しい忙しいと口走りせわしく動きまわっている図書館員をみても、利用者は「動いている図書館」と感じるわけでもない。図書館はレイアウトを一度決定しなるとなかなか変更を行わない。これは空間的な動きがないことを指すが、筆者が言いたいのは空間ではなく情報の動きが少ないことである。「動いている」とは、図書館が時代とともに動き、話題になったテーマに関する情報提供や情報提示をするという積極的な意味合いを持つ。

電子ジャーナルは、契約リンクを貼っておけば最新で魅力的なコンテンツが勝手に更新される情報資源である。図書館にとっては、契約料とひきかえに多くの手間をかけずに利用者が求める最新情報を24時間スピーディーに届けることができる。一方、直接来館する利用者に対しては、案内図書館は魅力的なコンテンツを提供するという意識が薄れているのではないだろうか。医療の世界は、トピックがめまぐるしく変わり、ダイナミックな潮流も見えやすい。医療界のトピックは、マスコミにも雑誌特集号にも頻繁に取り上げられ、図書館員にも認識しやすい。しかし、私たちのホームグラウンドである図書館空間を見てみると、時間が止まっているかのごとく何も変化が見られない。

図書館に時間的な動きを与えるひとつの好例は新聞記事の切り抜き掲示であるといえる。勤務医は超多忙な生活を強いられており、

このドクターは新聞を読んでいるのかなと思うことがあるが、医療を扱った新聞記事の切抜き掲示があれば、社会の動きを図書館で知ることができる。これは、図書館が社会の動きに敏感であることをアピールする演出のひとつである。

インターネットは自ら積極的に入手しに行く媒体であるため、そこからこぼれ落ちる情報を図書館員が編集して提供することは、図書館PRの一手段となるだろう。デジタル時代だからこそ、図書館員の専門性をアナログに表現することも大切である。

Ⅳ. テーマ展示

図書館員の専門性を表現するのに、前述のこぼれ落ちる情報を図書館員が編集し提供する意義は大きい。利用者である医師や看護師などメディカルスタッフが見落としがちな情報を提供する、多忙な利用者に来館してもらうばかりでなく図書館から病棟に出張していくなど、時間や空間の都合で図書館を積極的に利用できない利用者の「すきま」や「ニッチ」と呼ばれる領域を埋めることも、専門性の力の発揮しどころかもしれない。

図書館において配架は、利用者があまり声にださないが不便を感じている領域であり、改善できる点が多いように思われる。一例として分類を見てみよう。

現在、多くの医学系図書館では、日本十進分類法 (NDC) や米国国立医学図書館分類法 (NLMC) を使用している。しかし、どうしてもこれらの分類から漏れてしまう図書があり、配架場所が別れてしまう場合がある。このこぼれてしまう図書には、分類件名表が追いつけない現代医療のトピックが多い。診療ガイドライン、知的財産、バイオ、介護、生命倫理、死生学などいくつも挙げることができる。どこかの分類に割り当てられ、書架上

配架されると、多くの書架に紛れて自発的な利用者を待つ形となる。

しかし、図書館利用者の立場とすれば、探しやすい、わかりやすい、直感的に理解できる表示 (分類や見出し) がある方が親切である。そこで、特定のテーマについて情報を編集する「テーマ展示」の手法で図書館員の専門力を発揮してほしい。テーマ展示は、多くの資料からの選書、多角的な意見からなる蔵書群、時代と利用者のニーズにあったテーマを選ぶといった手間をかけることが大切であるが、比較的少ない予算で効果的なアピールができる。しかし、アピールできることは感じていても、分類体系を崩すことへの畏怖や、図書館内での慎重論派がストップをかけるなど、実験的なことをする以前に自らタブーを作っているのが現状である。同僚を懐柔するために期間限定のイベントを実施して、利用者の反応を見るのも良い。利用者から評判が良ければ、やりやすくなるだろう。

公共図書館では、毎年夏休みになると子供向けに推薦図書や「むし」特集などの企画モノの展示を開催している。8月15日前後に「戦争」特集、9月1日の震災記念日近くになると「防災」特集などが定番企画だ。担当する図書館員は日常業務と兼務で展示準備をするため、負担が大きい。しかし利用者の目からは毎年同じ出し物で、ルーチン化しており手抜き展示という感じも否めない。担当者の熱意によって変わる場合もあるが、せっかくの労力にもかかわらず意外にも効果が小さいのは、テーマに動きがないのと、前年の資料の多くを再利用しているからではないだろうか。利用者は図書館員の仕事をしっかり見ていることを意識すべきである。

Ⅴ. 闘病記文庫に見る情報編集

ここでテーマ展示の事例を紹介し、考え方

を理解いただきたいと思う。すきま的なテーマ、分類、配架の三重苦を克服したのが「闘病記文庫」である。小規模なテーマ展示ながら、多くの新聞、テレビ、ラジオで取り上げられた社会的インパクトのある情報発信だといえる。

この「闘病記文庫」は2005年6月に東京都立中央図書館（東京都港区）に約1,000冊の闘病記を集めて一箇所に配架して誕生した。闘病記を研究するある民間研究団体から寄贈を受けたことが同文庫を設置したきっかけになった【朝日新聞・夕刊（'05 7/20 “窓・論説委員室から”）】。

闘病記というジャンルがあることは誰でも耳にしたことはあるはずだ。闘病記は、先輩患者の生の声を追体験させてくれる情報資源であり、不安、苦痛、悩み、死の恐怖など当事者でしかわかりえない情報が赤裸々に描写されている。

この闘病記は従来、社会でも図書館でも偏見を持たれている資料のひとつである。患者・家族の一方的な医療者批判、患者の主観的な闘病生活の身辺雑記、そのようなエビデンスの低いものを提供しては責任が持てない、患者さんは精神的に不安定で、置かれている状況が状況だから何でも情報を取り入れてしまう、素人が書いた医学的に不正確な記述や治療法を信じたら困るなどと、ある種の「近づきたくない」分野として図書館や患者図書室で積極的な情報提供をしてこなかった。

しかし、図書館員と言えども闘病記の全体像を知った人はいないに違いない。患者さんは、当該疾病がどんな病気なのかという病態的な医学情報を知りたいと同時に、病気になった時の不安をどうしたらいいのか、今後の入院生活や痛みへの恐れ、将来のこと、残された余生をどう生きるかという「病気とつ

き合う情報」も医学的知識とともに欲しているらしいというニーズを薄々、医学図書館員なら感じていると思う。

闘病記は、たった数行の他人の闘病体験の重さに、感動し励まされる病の体験を共感しあうメディアである。自分の経験・苦悩を後輩患者に伝えたい、闘病記を書くことにより自分の気持ちを吐き出したい、整理したい、そして「人に役に立ちたい」という気持ちも闘病記に込められてもいる。

闘病記は該当する分類がなく、NDCでは、医学・伝記・文学・エッセイ・ノンフィクションなどに配架されている。そして書名だけでは闘病記なのかわかりにくい。書名に病名がない場合、表紙の写真や帯情報、前書きやあとがきをみなければ、闘病記かどうかわかりづらく、「ステルス資料」という特徴を持っている。

この闘病記という情報源を、どうやったら闘病記を求めている人たちに届けられるか。

配架場所は重要であるが、闘病記を一箇所にまとめただけでは不十分である。著者名順、書名の五十音順、出版社順などにしても不十分である。闘病記を求めている人たちは、同じ病気の体験記、できれば同じ年代、同じ職業、同じ治療法、同じ家族構成、同じ経済状況など、いかに自分自身の境遇に近い立場、自分と同じ病気の人の体験談を求めているのである。では、そのような細かいニーズを満たすような分類はあるのだろうか。

そこで、理想的な闘病記の提供方法を検討して実践したのが「闘病記文庫」である。従来の図書館分類、配架方法にはない方式で実証実験をしている。闘病記の内容が「何の病気の闘病体験」なのかという点に着目し、全部で221疾患の見出しを用意した(図1)。このようなピンポイントで具体的な分類見出しは全国初といわれる。この病気別の闘病記リ

ストは、1冊1冊内容を確認した労作である。一番のこだわりは、闘病記の価値を高めるカバーと帯を捨てずにそのまま透明ブックカバーで装丁した点である。帯にある内容の簡単な解説を利用者がみて、読みたい内容が書かれている闘病記かどうか判断する大きな役目が「闘病記の帯・カバー」なのである。

探しにくく、図書館のあちこちに散らばっていた闘病記が「闘病記」という看板をかけたことで、利用者がアクセスしやすい環境が実現した。この看板がテーマ展示である。

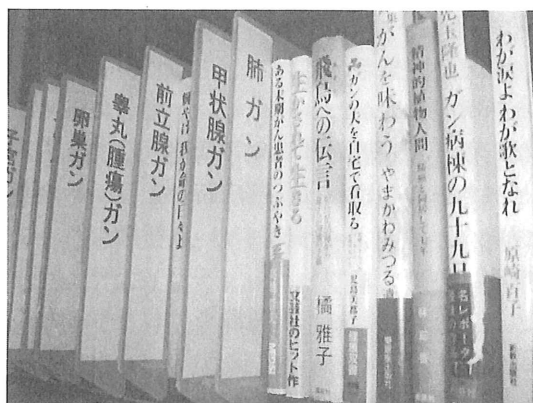


図1 疾患の見出しで内容がひと目でわかる

VI. おわりに

この実証実験の成否を判断するのは図書館員でなく利用者である。公共図書館で闘病記が役に立つのなら、その環境を整備しましよ

うというものである。

闘病記の提供はあくまでも一例で、利用者はこの情報を「届けたい」という図書館側の姿勢があれば簡単に実現できる。なにより大きな意義は、今まで利用者が見えにくかった資料について潜在ニーズを探り、かつテーマ展示として出現させることにある。従来あまり関心が払われなかったテーマに焦点をあて、有益な社会資源として活用してもらいたいという実践活動と言えよう。

闘病記に限らず、テーマは無限に転がっている。赤十字、看護師の悩み、子どもへのインフォームドコンセントなど、所属機関や地域に深く関係するテーマは既存の資料に手を加えるだけで何か生まれる場合も多い。

ある主題を深く掘り下げ、広く情報発信するには、利用者ニーズを見つけ、情報を加工し、どうやって情報を見せるかというプロセスが重要である。それが出来れば、図書館から教わる、図書館で見つける、出会うという、利用者と情報との交差点を作ることができる。同時に、図書館における「動き」の演出が可能となる。図書館でのブラウジングで得られる機会を、テーマ展示によって図書館員の手で増幅することは、図書館活性化のひとつになるだろう。